

作家の肖像

第 10 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



Photo: Eijun Lacombe

1938- 三宅一生

みやけ いっせい
1938年広島県生まれ。多摩美術大学図案科卒業。パリで学んだ後、NYに渡り、69年に帰国。70年に三宅デザイン事務所設立。73年よりパリコレクション参加。「一枚の布」を基本理念に据えて、衣服デザインに取り組む。93年に「PLEATS PLEASE」、98年に「A-POC (A Piece Of Cloth)」、2010年に「132 5. ISSEY MIYAKE」をスタート。2004年、三宅一生デザイン文化財団設立。

目を見はる展覧会

今年3月に、国立新美術館（東京都港区）で「MIYAKE ISSEY 展：三宅一生の仕事」が開催。彼の初期の作品から、「PLEATS PLEASE」「A-POC」「132 5.」(右ページ参照)が一同に展示されたすばらしい内容で、圧倒されました。展示会場の入り口から出口まで、まったく目が離せず、理屈抜きに感動的でした。それは空間と三宅さんの作品が見事な化学反応を起こした、「奇跡の展覧会」だったと思います。

思い起こせば、私が最初に三宅さんに衝撃を受けたのは、1998年に開催された展覧会「ISSEY MIYAKE Making Things」を観たときでした。「Making Things」つまり「ものづくり」という視点で、彼の象徴ともいえる「PLEATS PLEASE」以降の仕事を紹介した内容でしたが、これを観て、三宅さんは単なる服飾デザイナーではなく、もっと創造的で、視野の広い「アーティスト」なのだということを、強く感じました。

空間すべてをデザインする

彼の作品は、単に人間の肉体に着せる「服」ではなくて、服を含めた空間すべてを考えてつくられています。そういう意味で、彫刻家のような人だといえるし、内と外との関係を強く意識してデザインしていることから、建築家のような人だともいえる。

私は以前、ある著名な建築家に「あなたに最も影響を与えたアーティストは誰ですか」と尋ねたところ、「三宅一生さんです」という答えが返ってきて驚いたことがあります。三宅

さんは、他分野の作家にも強い影響を与える、服飾デザイナーという言葉ではくくることができない創造者なのだ改めて思いました。

たぐい 類まれなアーティスト

彼は広島県生まれ。高校生のときに、家の近くにある、イサム・ノグチが設計した「平和大橋」を見て衝撃を受け、デザインの道を志すようになったそうです。「平和大橋」は、プリミティブなエネルギーをもつ、独特なフォルムをしています。この橋に影響を受けたというのが、実に三宅さんらしい。彼から彫刻家のような力を感じるの、そのようなことも理由にあるのかもしれませんが。三宅さんは20代の頃、パリでオートクチュールを学び、そこで5月革命に遭遇。市井の人々が街頭で主張する姿を目の当たりにし、「こういう人たちのために服をつくりたい」と思うようになったそうです。そして、帰国後はその言葉どおりに突き進む。

彼は、デザインをするだけでなく、日本の工場や原料の産地を育てていくためにも力を注いでいます。また、素材の再利用についても研究しています。一人の創造者が、どのように社会の一翼を担えるのか、絶えず考えている人なのです。

そういう姿勢からも、私は、彼が類まれなアーティストだと感じずにはいられません。(談)

酒井 忠康

さかい ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校「美術」代表著者。



左上 / ISSEY MIYAKE
「ムーンライト」1989年作/1990年春夏

ポリエステル100%
熱処理で折れ目が長時間保たれるポリエステル素材を使ったプリーツの衣服。生地を裁断・縫製してからプリーツ加工を施すという独自の製法によってつくられる。ひだに沿って巻いてコンパクトに収納できるが、しわにならず美しいフォルムを保つ。

下 / 132 5. ISSEY MIYAKE
「No. 7」2010年作/2011年vol.1-2

ポリエステル100%
1枚の布を折りたたんでプレスし、切り込み線の位置を変えることで、シャツ、スカート、パンツなどを生み出すという画期的な方法でつくられる。<写真右>は、フラットにたたまれたシャツ(上)とパンツ(下)。この平面の図形から立ち上がる3次元の造形はコンピュータ・サイエンティストの三谷純との協働によって生まれた。



右上 / ISSEY MIYAKE
「A-POC キング&クイーン」
1998年作/1999年春夏
A-POC 「エンジェル」2000年作/発表

綿55% ナイロン42% ポリウレタン3%
チューブ状に編み機から出てくるニットロールには、すでに服の形が連続して編み込まれており、ガイド線に沿ってはさみを入れて1着分を切り取る。糸から最終形をダイレクトにつくる生産プロセスでは、布のむだを抑えることができる。当時、三宅デザイン事務所でもニット素材を担当していた藤原大とともにプロジェクトを始めた。

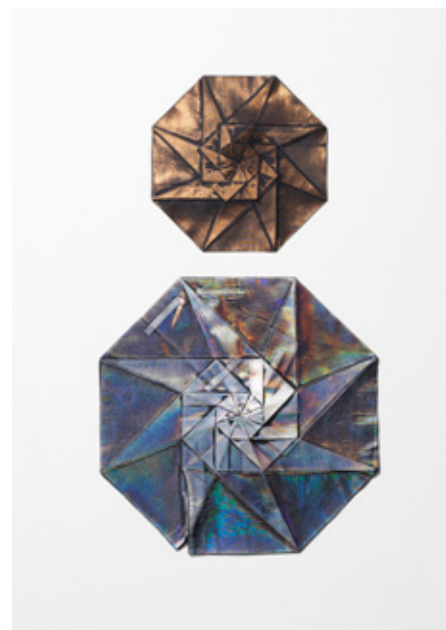


Photo: Hiroshi Iwasaki